

## 生誕 130 年記念 北川民次展 —メキシコから日本へ

世田谷美術館 24. 09. 21～11. 17 福島・郡山市立美術館 25. 01. 25～03. 25

本展では、画伯「北川民次」(1894～1989) のメキシコ時代から一貫して見られる人々への温かなまなざしと鋭い社会批判をはらむ代表作に加え、未来の社会を作る子供に向けた絵本や美術教育の仕事や念願の壁画などに注目される。

展示作品は、油彩約 60 点、素描・版画など約 50 点に、1920～30 年の多様な芸術動向に関する資料、当時交流した芸術家たちの作品を加えた「約 180 点」により、画伯の表現を多角的に見つめる約 30 年振りの回顧展の開催である。

展示の中心をなすのは「油彩作品」であるが、画伯が強い関心を抱いていたのは「壁画」で、この壁画を意識した構図で描いた作品を多く描いている。



北川民次 《ロバ》 1930 年 油彩/カンヴァス 左図

画家の経験や考えをもとに、情感を込めて対象をとらえるまなざしは、メキシコでの暮らしに不可欠な「ロバ」にも注がれる。ヤツデが植えられた人家の軒先で飼われた「ロバ」に穏やかな表情を与えて描かれている。

北川民次 《農漁の図》 1943 年 油彩/紙・板 中図

戦時下最後の二科展では、銃後の労働を珍しく明るい色調で描き、極端な遠近法により、いくつもの要素をつなぎ合わせて空間を満たすような構成は、壁画的な画面を意識したものであろうか。

北川民次 《いなごの群》 1959 年 油彩/カンヴァス 右図

安保闘争の時代に沖縄の基地問題を取り上げ、三分割をした画面の上に「平和を祈る女性」、中段に民衆の連帯をするような「いなごの大群」、下段には「悲しみに暮れる女性と堀先には隊の行進」が描かれている。